県高校駅伝 3年ぶり県勢男子最多18回目の全国へ

全区間で「区間賞」に輝く圧巻の走り

1位でゴールする川上大敬
（新潟日報デジタルプラス 令和6年11月1日付 新潟日報社提供）

第75回全国高等学校駅伝競走大会新潟県予選会が11月1日、デンカビッグスワンを発着、中継点とするコース（男子7区間、42・195㎞）で行われ、中越が2時間8分52秒で3年ぶり18回目の優勝を決めた。「新しくて強いチーム」とは渡辺裕人監督。今夏の妙高高原合宿や全国大会の優勝校も集った菅平合宿において、良い刺激を受けて着実に走力を付けた選手たち。それでもさらに追い求めたもの、それが真の「強さ」。選手たち自らがミーティングで弱い部分を語り合い、選手個々の意識と行動をチームの共通の取り組みに高めていった。また日々の練習では、走練習の前後の体操や動き作りなどのメニューも丁寧に行うなど、惰性や妥協をなくしていった。

監督は「特別なことをしたわけではない。ただ、選手たちが目的意識をもって直向きにやるべき事をやった」。結果「選手には自信があった。落ち着いて試合に臨めた」と今大会を総括した。中越は7人全員が区間賞の走りで2位に4分以上の大差をつけた。

最長10㎞の1区は佐藤悠斗（2）。「必ず自分が良い流れをつくる」と終始先頭に立った。自ら志願をして得た1区、9秒のリードをチームにもたらした。つづく2区村田大翔（3）は3㎞のスピード区間で「自分の所でどんな位置で来ても勝つ」とリードタイムを維持し、勝負の流れを引き寄せた。3区の丸山展（2）は監督に「勝負を決める力がある」と評価されるとおり、「自分の走りで優勝を決定づける」と後続との差を34秒に広げ、レース前半の首位を確実なものにした。4区星野愁（2）は「自重せず、自信をもって突っ込んで粘る」と気迫あふれる走りで首位独走を守り、後半へ繋ぐ。5区金澤崇眞（2）は初の駅伝。後続のいない中「自分でさらにチームに勢いをつけたい」と力走した。6区は主将の保坂玲弥（2）。「保坂が6区を走ること自体がチームの層の厚さ」と監督。「きつい時こそ応援してくださった方々に恩返しをしたい」と粘り強い走りで応えた。7区川上大敬（2）は「冷静に焦らず、自分の走りが出来れば絶対に勝てる」とアンカー区間をトラックの5000㍍自己記録を上回る走りで締めくくった。監督は「夏から今大会にかけて弱さを強さに変えた」と讃えた。

3区丸山展から4区星野愁へ

2年生を主軸とするチームであり、エース級が4人揃う。「誰が1区でも任せられる、それが今年の強み」。北信越高校駅伝大会は11月17日に長野県で行われる。昨年は同大会で準優勝をしており、全国への前哨戦に対して監督は「チーム内で力が拮抗している。いろいろ試してみたい」と選手たちの労に報いながらも、さらなる成長への期待感が伺える。全国高等学校駅伝競走大会は12月22日に京都市で行われる。いざ都大路へ。

◆監督談話

渡辺裕人監督

何が起きるかわからないのが駅伝。感染症も含め、何が起きても「想定内」として、動じずに、やるべきことを淡々とやる。舞台に向かう選手たちに伝えたのも、「平常心を大切に」という言葉だった。

普段の練習は、むしろ余裕を持たせた設定にした。ベースとなる部分はより深く、体操・動きづくりや姿勢づくりなど、今まで行なってきたことを、今まで以上に丁寧に行うことを徹底した。その点で、「強さ」を求めた。

長距離選手を表す言葉に、「速さ」とともに「強さ」がある。

「新しくて強いチームになろう」。今年度のスローガンだ。昨年の反省から、一年をかけてこの姿勢を養ってきた。失敗を恐れず、自信の持てる思考・生活・行動をする。選手たちは怠ることなく日々実践を重ね、少しずつ強さを身に付けてくれた。

「巻き起こせ、勝利へのムーブメント」とは、夏前からのスローガン。鍛錬の夏を迎えるにあたり、チーム力の強さを求めた。一人一人がチームにムーブメントを巻き起こす存在であり、「誰か」に頼るのではなく「自分」が巻き起こすのだ、との自覚を促した。「自分の取り組みでチームにどんな良い影響を与えられるか、常に考えよう」と伝え続けた。

経験の薄いチーム。ただ、選手たち自身が主体的に思考し、行動し、チームとしての強さも着実に培っていった。

夏合宿前、選手たちは数日にわたり、長時間のミーティングを重ねていた。選手たち自身が必要と判断したためだった。仲がいい。だが、信頼が甘えに変わったり、馴れ合ったりする「弱さ」はない。全国から10校が集まる合同合宿でも、強豪校と切磋琢磨し、刺激を受けて心身ともに強くなった。

当日は選手の多くが「調子がいい」と口にしたため、頑張りすぎてしまうことだけが心配だった。レース中も1区から流れができており、それを引き継ぎ、落ち着いて、確実に走ってくれれば、という思いだけだった。

レース後、選手にかけた言葉は「よくやった」だった。強くなったな、との実感がわいた。2年間苦しい時もあったが、多くの人に応援や支援をしていただき、その感謝の気持ちを結果で表すことができ嬉しく思う。

2020年全国大会で県最高記録、2021年県最高順位。伸び盛りの現チームは、全国入賞を口にしたチームと遜色ない。

今年から、全国大会には58校が出られる。今まで以上にレベルの高い戦いが想定されるが、学校最高順位「25位」、「2時間6分」を目標に、強さを磨いていく。

男子全国高校駅伝競走大会

たけびしスタジアム京都　12月22日㈰ 12時30分スタート!!

◆選手談話

1区
佐藤悠斗（2）

1キロ手前で先頭に出て積極的な走りができ、きつくなってからも粘りの走りが出来て2位を少し離して1位でタスキを繋げられた。全国は県と違って登りや下りのコースがある。1か月弱でその対策をし、自分より強い人たちに勝つ。また学ぶ姿勢を忘れない。

2区
村田大翔（3）

自分の目標としていたタイムには届きませんでしたが、後ろとの差を広げられる走りが出来て良かった。都大路では、今回見つかった課題を改善していき、チームに貢献する走りをしたい。

3区
丸山　展（2）

後続との差をつける走りが出来たが、目標タイムを切ることが出来なかった。今後の改善点を見つけられて良かった。全国で通用する走りが出来るように、残りの限られた日数の中で走力・チーム力ともに向上させていきたい。

4区
星野　愁（2）

今出来る最大限の走りを求めて、1・2・3区が作った流れに乗って自信を持ち、突っ込んで粘る走りが出来た。都大路へは県代表としての自覚と責任を持って準備していく。全国で戦えるチャンスを無駄にしない。関わってくれた人・応援してくれる人に走りで感謝を表す。

5区
金澤崇眞（2）

納得できる走りではなかった。スピードランナーらしくもっと積極的な走りをしたかった。都大路では、県駅伝よりも良いタイムで走り、先生・親・応援してくださる人々に感謝を伝えられる走りがしたい。

6区
保坂玲弥（2）

自分の走りをして区間賞を取ると決めて走った。結果、無事に7区にタスキを渡すことが出来て良かった。都大路では、県よりも力を発揮できるように準備を大切にして、新潟県歴代1位のタイムで走れるように頑張る。

7区
川上大敬（2）

もっと速く走れたと実感できたレースである一方、自分の走りが出来てトラックでの自己ベストを超える走りが出来たので良かった。都大路では、県駅伝を上回る走りをして、1つでも上位でゴールし、来年に繋がる駅伝にしていきたい。

越高スポーツ

第128号（特別号）
2024.11.13

発行
中越高等学校
〒940－8585
長岡市新保町1371－1
TEL（0258）24－0203
FAX（0258）24－0205
ホームページ
http://www.chuetsu-h.ed.jp/

優　勝
2時間08分52秒

第1区 10㎞	佐藤悠斗（2）〈長岡秋葉中〉
①	30’55
❶	30’55
第2区 3㎞	村田大翔（3）〈小千谷中〉
①	08’57
❶	39’52
第3区 8.1075㎞	丸山　展（2）〈燕吉田中〉
①	24’54
❶	1：04’46
第4区 8.0875㎞	星野　愁（2）〈魚沼広神中〉
①	24’50
❶	1：29’36
第5区 3㎞	金澤崇眞（2）〈十日町水沢中〉
①	09’04
❶	1：38’40
第6区 5㎞	保坂玲弥（2）〈十日町川西中〉
①	15’07
❶	1：53’47
第7区 5㎞	川上大敬（2）〈十日町川西中〉
①	15’05
❶	2：08’52